

## 新企画「特別寄稿」によせて 加藤恵津子（編集委員長）

2013年、ICUジェンダー研究センターは設立10周年を迎えました。これにあたり本ジャーナルでは、新企画として「特別寄稿」のセクションを設けることに致しました。ジェンダー・セクシュアリティ研究において見過ごされがちな問題、チャレンジングなテーマ、時宜にかなったトピックなどについて、独自の視点から果敢に研究・実践活動をされている第一人者の方々に、ご寄稿いただいで参ります。

### 「性的知性」の提唱者・村瀬幸浩さん

初回の寄稿者である村瀬幸浩さん（「“人間と性”教育研究協議会」幹事、一橋大学講師）は、「大学」「男子」「性教育」の三つを結びつけたパイオニアです。村瀬さんは、性教育とは「男女の身体や生殖の仕組みを教えるもの」「高校までに終わっているもの」「女子さえしっかり学んでおけばよいもの」などの一般通念が、「日本人の性」をいかに貧しく、暴力的にしているかを根底から暴き、性教育を社会科学の領域に高めてこられました。

男子校・体育会出身の村瀬さんは、かつてのご自身の性知識がすべて「エロ本」から来ていたこと、高校の体育科教師だったにもかかわらず、女性の心身について無知のまま結婚し、妻の心理・生理と自分のイメージ（妄想）との間のギャップに愕然として猛勉強を始めたことなどを、公に、赤裸々に語っておられます。それゆえ、かつての自分を含み男性への糾弾は容赦がなく、「大学教授、警察官、性犯罪を裁く裁判官、弁護士…学歴を問わず、日本の男の性知識の源はすべて基本的にエロ本やアダルトビデオ」と言い切ります。また女性の主体性、性の多様性、性感染症、中絶、デートレイプ、結婚といった幅広いトピックを通して、「性的知性」、すなわち性についての批判的・学際的・包括的な知力（「知識」ではない）を持つよう呼びかけます。「人生の先輩」によるこのような真剣勝負の講義は、この20年間、あらゆる性・性別自認の学生を触発し、振り返りを促し、励ましてきました。

村瀬さんの講義はまた、ジェンダー研究に身を置く大学教員にも猛省を促

します。「ジェンダー」「セクシュアリティ」という学術用語の陰に隠れて、教員は「セックス（性行為）」—接触、挿入、快感、不快、喜び、心や身体の痛みなどが伴う生々しい生のぶつかり合いとしての行為—を、教室から、大学から排除してこなかっただろうか？このイシューについて、学生と真剣に向き合う覚悟はあっただろうか？何より、自分自身が「セックス」をめぐる、それを選ぶにしても選ばないにしても、実り豊かな経験や徹底的な思索を重ねてきただろうか？実際、2012年4月の多摩ジェンダー教育ネットワーク（「活動報告」参照）の会合で、本稿のもととなるゲストレクチャーを村瀬さんにいただいた折、参加者の教員から上のような反省のコメントが聞かれたものでした。

「教える私」の「性的知性」を高めてくれるという点においても、性教育の可能性は計り知れません。性教育「を」進化させるだけでなく、性教育「で」自ら進化したいという望みを教員も持ってこそ、ジェンダー・セクシュアリティ研究・教育の発展はあるのでしょうか。

## **Beginning a "Special Contribution" Column** **Etsuko KATO (Chief of Editorial Board)**

### **Beginning a "Special Contribution" Column**

2013 marks the 10th anniversary of the Center for Gender Studies' establishment. On this occasion, we have decided to add a "special contribution" column to this journal. We would like to receive contributions on topics such as issues easily overlooked in gender-security studies, challenging topics, and other current topics by leading scholars whose bold research is conducted in a unique way.

### **Proponent of "Sexual Intelligence": Yukihiro Murase**

First-time contributor Murase Yukihiro (Executive Secretary of The Council for Education and Study on Human Sexuality, Hitotsubashi University) is a pioneer who drew associations between the terms "university," "boys" and "sex education." Murase strengthened the domain of sex education in social sciences by profoundly exposing how the commonly accepted ideas about sex education, which profess that sex education informs about the mechanism of male and female body and genitals, should be passed on before the end of high school and requires only girls to properly study it, are outrageously undermining and make violent the sexuality of the Japanese people.

Murase talks openly about how in his younger days, most of his knowledge about sex was based on books of adult literature, and despite being a teacher in the education department at a high school, he got married knowing nothing about the female body and psyche. He was perplexed at the difference between his understanding and his wife's mentality and menstrual cycle, which caused him to do further research. Therefore, without showing any leniency towards his former male self, he asserts that the source of sexual knowledge of all Japanese males,

irrespective of their academic background (including university professors, policemen, judges who look into the matters of sexual crimes, lawyers etc.), is either adult literature or videos. Moreover, through wide topics such as female individuality, gender diversity, sexually transmitted diseases, abortion, date rape, and marriage, he urges people to take possession of “sexual intelligence.” In other words, he feels it is necessary to gain critical, interdisciplinary and comprehensive wisdom (different from knowledge) about sex. For the past twenty years, he has intrigued and encouraged students of every sexual orientation and gender, and persuaded them to consider their actions.

Murase’s lectures even instill the urge for retrospection in those university teachers who have dedicated their whole life to research in the field of gender studies. Hiding behind technical terms like “gender” and “sexuality,” haven’t teachers tried to completely eliminate the act of “sex” from classrooms and universities, refusing to a clash with its vivid nature involving fondling, intercourse, pleasure, disgust, joy, and mental and physical pain? Were teachers prepared to seriously face their students and discuss this issue with them? Moreover, did he develop a rich experience or profound contemplation of sex, irrespective of the fact whether he adopted that lifestyle or not? In reality, in the April 2012 gathering of the Tama Gender Studies Network, the above reflective questions were directed towards Murase by the participating teachers. Murase was there to deliver the guest lecture, which also is the theme of this paper.

As for whether sexual intelligence makes one a better teacher, the potential of sex education and its promise of enrichment cannot be measured. We cannot only allow the evolution of sex education; we must be evolved by it. That is how we hope research in Gender and Sexuality Studies will expand.

## 性教育の可能性 ―セックスとジェンダーをつなぐ学習の創造― 村瀬幸浩（一橋大学 講師）

### はじめに

大学生に性について語り続けて20年になる。科目名は『ヒューマンセクソロジー』である。当初「いまさら大学生に性の何を語るのか、そんな必要などあるのか」などと揶揄する週刊誌もあったが、実際に講義を続けてきた実感からいうと「彼（女）等は性の学びを待ち望んでいる」「性について学ぶ必要性はますます大きくなっている」と断言できる。

それは大学生の声として「この授業は大学生全員に必修科目にすべきだ」という意見・要望が必ずといっていい程出ることにも表れているし、実際に「打てば響く」と言えるほど熱心にとりこんでいる。

さて、性教育はかつて **Sex education** といわれたが、そのベースになっていた学問領域は医学・生理学・保健学などであった。その内容も月経、妊娠、出産、避妊など生殖をめぐる科学と、性感染症などの医学的知識をわかりやすく伝えること、あわせて性行動の抑制を目的とした性の道德教育（かなり二重基準的な）の傾向の強いものであった。しかし、今日次第に一般的に **Sexuality education** と表現されるように、性的欲求や性行動、人間関係における感情、行動、社会的心理的な側面などすべて含まれるものとして考えられるようになってきている。そこには当然ジェンダー視点からの追求も主要な課題として求められるのである。

私がすすめてきた「ヒューマンセクソロジー」の講義は上に述べた立場に立ち、次のような柱立てのもとに組み立てられている。

- 1) デートDVという形であらわれる両者の関係性の危機・破綻の背景にあるものの考察。
- 2) 人間にとって「性」はどのような意味をもっているのか。なかでも性の快楽性について考える。
- 3) 予期しない妊娠という結果が生ずる原因である性への認識の不十分さと両者の関係性を問い直しつつ、人工妊娠中絶手術や避妊に対する理解を深める。さらに不妊の可能性と対応についても学ぶ。

- 4) 性の多様性（性別に関わる、性的指向にかかわる）への認識を通して自分自身を含め人間の性への理解を深める。
- 5) HIV感染その他、性感染症に対する認識を深める。
- 6) 性とメディア、性と暴力その他、性とジェンダーバイアス、性と社会へ意識をひろげる。
- 7) あらためて生殖につながる両性の生理についても学びなおし理解を深める。
- 8) 恋愛、結婚、シングルライフ、多様な共生スタイルについて意識をひろげ、自らの人生イメージを描いてみる。

## 各柱における講義のポイント

### 1) デートDVについて考える学習

DVについては防止法ができたこともあって学生たちは一応知っているが「デートDV」という言葉を知らない学生は少なくない。しかも言葉は知っていてもそれが自分（たち）に関係する問題と思っている学生は少数である。これは**Violence**という言葉が激烈とか猛烈という意味であり、しかも暴力、それも身体的暴力（撲る、蹴る、髪をひっぱるなどの）とだけ結びつけてイメージされているからであって、実は暴力として精神的（相手を威嚇したり怒鳴ったり、容姿容貌など罵ったりなど）、性的暴力（セックスの強要や避妊への非協力、無視など）も含まれて扱われている、と学習がすすむにつれて俄に現実の問題として意識されるようになる。特に携帯電話などによるつきまとい、束縛なども精神的暴力に含まれることを知るに及ぶと、一挙にわが身の問題として意識されはじめる。

なぜ結婚も婚約もしていないのに、いやだったらすぐにでも別れたり関係を断つことが可能なはずなのにそれをせず（それが出来ず）に、束縛・支配・恐怖におびえながら関係を続けるのか。そしてその結果、いきいきとした日常や将来展望を失い心を病んでしまうのか。実はここに性交という性行為がもたらす特別な意味がある。というのは、デートDVという暴力はいわゆる恋愛関係（性交には至っていないという段階）のうちほとんど起こりにくい。お互いに相手に気に入ってほしい（特に男性の側に）ため、相手を

尊重する「やさしい」態度をとるからである。

性交はそうした恋愛関係の一層の深まりの結果として行なわれる、と一般に言われるが実際には仲々そのようにはならず、性行為に対する未熟な認識のままでは、性交を経ることによって、横ならびで対等と思われていたものが、支配被支配の関係に陥ることになる。そして支配―被支配（従属）の関係に変わることが愛の証しという意識に切り変わってしまうことになりがちである。それはわが国におけるジェンダー関係を反映したものであり、対等な個と個の関係を成熟させていく歴史の浅さを物語っているといつてよいだろう。「セックスした女は“俺のもの”“俺の女”」であり、女にしてみれば「“私の男”だから“ほかの女と口をきくな、つきあうな”」ということで束縛が始まるのである。さらにその背景にあるのは“恋愛幻想”“カップル幻想”、（「カップルになること自体、価値あること」という）であり、カップルにならないのは負け組、落伍者であるというプレッシャーがある。さらにカップルになるにはセックスするのが当然という風潮や、しないでおかしいし、していないのは自分たちだけではないかというような“ピアプレッシャー：Peer pressure（仲間の圧力）”がセックスを急がせるのである。

つまり、互いの自立性を尊重しながら性的関係を続けるという精神的成熟を伴わないままのセックスは、自分の幸せ感をみとすために相手の存在・生活を巻きこんでしまう、巻きこもうとする、そして相手を支配しコントロールすることで「愛されている」「愛している」と思いこもうとし、相手がそれに応じないと腹を立て、時に暴力に及んだりつきまとったりするというわけである。

こうした意味でデートDVは「愛する」二人の関係のあり方を問う格好の教材であり、学生たちの反応もひととき大きい。

## 2) 人間にとっての「性」の意味―その快楽性について―

「性」が人間にとって持つ意味と問えばまず「生殖」を挙げることが多い。「種」として存在し続ける上でそれは当然であるし、大学生への講義内容としても重要な意味がある。

しかし私たちの日常の「性」は生殖を目的としてあるわけではない。むしろ

る生殖を回避しながら営んでいる。生殖を回避してセックスに近づく目的は「快感・快楽」である。にも拘らず、性の快感・快楽を意識的に追究することをせずに軽視・蔑視する傾向が依然として強くあることは、きわめて残念であるばかりでなく日本の性の最大の問題点の一つだと思う。

もともと性の快楽性がすべて否定されているわけではないがそこでいわれる快楽はほとんど男性のものであって女性が追い求めるものではないとのジェンダーバイアスが根強くあるし、男の求める快楽もしばしば射精に伴うオーガズムのみを求める自己中心的なものであり、自己中心的であってもよいという思い込みも根強い。そこでイメージされる「快楽」とは生理的、肉体的なものであると同時に、しばしば攻撃的、性差別的な色彩を強く帯びていることが多い。

セクソロジーで学ぶ快楽とは、男女双方（一応異性愛を例にとっていう）にとって生きる喜びとなるものであり、従来の男性中心の攻撃的なセックスイメージをくつがえす方向性を明確にもつものである。そのためにも「生殖」＝「生命という新しい価値を産み出す生産的な行為」、「快楽」＝「エネルギーの浪費、何も産み出さない無駄な行為」というように、快楽を価値なきものとする考え方をのりこえる意識を育てることが大切になる。その時、快楽のもつ価値として、①自分のからだ・性器に対する愛着やいとしさをうむ ②相手に快楽を与えた（分かちあった）ことから自らの存在に対する自信を産む ③快楽を得ることによって生きる意欲・エネルギーを産むなど指摘しておきたい。

性の快楽性についてのもう一つの学習は、精神的快楽＝ふれあう安心感、一体感など癒し（Healing）ともいうべき快感のことである。人間の皮膚感覚（触覚）は五感の中で最も古く、最も深く広くあるもので、この触覚を乳児・幼児のころからフルに働かせて外界とのコミュニケーションをとって生きていくのである。そして全身に及ぶ柔らかなタッチングやハグなどによって、生きる安心感や自己肯定感が育っていくが、それはまた生涯にわたるエロスの感覚の基でありスタートでもある。

人間のセックスは他の大方の動物のそれとは異なり、性器と性器を急いで交わらせ射精によって終わるばかりではなく、裸になって見つめあったり肌



を触れあったりなどのコミュニケーションやタッチングを伴う（求めあう）のは、ふれあいをもたらす安心感や快感を味わいたいからである。この快感を私は「心理的快感」と表現し、前述の「生理的快感」と合わせて性の快感・快楽性の二大要素とした。ところが世の中に流布する性情報はそのつくり手、受け手がともに圧倒的に男性であるために勃起―挿入―射精という男性の生理的快感のみをくり返しくり返し強調し、まるでセックスとはかくあるべきものという意識（インサート至上主義）が強固に作られてきてしまった。

生理的快感＝男性のもの、心理的快感＝女性のものなどと断ずるつもりはないし、断ずればそれは誤りである。またそれぞれの快感をどこからどこまでという生理と心理の間の線引きは不可能である。いわば入りまじったものと考えるべきであろう。その上で自分と相手の求める快感を自覚し伝えあい、どう受け容れられるかをコミュニケーションすること、二人の相互性、対等性にもとづいたエロスコミュニケーションこそ性の文化性というべきでないだろうか。

こうした講義は学生にとってとても新鮮で率直な反応がかえってくる。総じてこのようなセックス観についてまともに考えたりするのは初めてで、「自分の中でもややもやしていたものがとてもすっきり理解できた」という感想が多い。女子学生のみならず男子学生も同様といってよい。つまりセックスについて正面から客観的に考えたことはなく、結局ポルノやAV情報にすっかり意識が占領されていた（女性もまた恋人である相手方を通じて）のである。

自分と相手と共に納得のいくセクシュアルライフを営もうとすれば、それまでの性に対する思いこみを捨て一から学び合うこと、そうした主体性と関係づくりなくして幸せな性に近づけないことに学生たちは気づいていく。この意味で性の快楽性に関する学習の意味はきわめて大きいものがある。

### 3) 予期しない妊娠への不安、人工妊娠中絶に対する考え方を深める

大学生の性交経験が男女問わずほぼ60%（最近の調査では下降気味）となっていて「つき合うこと」は「セックスすること」とほぼ同じ意味あいを持つようになっている。その是非はともかく、現実にはそうなっていて予期

しない妊娠への不安も日常のものであるといえよう。なぜ不安なのか、私は二つの要素を示して話している。一つは避妊について確実な知識が身につけていないという不安、もう一つはその不安を伝えあって解消するためにとりくむ関係になっていないという不安である。前者について私はコンドーム法と経口避妊薬の服用の二つの方法を丁寧に話している。いまここでその説明はしないが、講義をしていて気づいたことを紹介しておこう。

コンドームの使用の重要性についてはわかっている、それを相手に伝えて実行を迫るだけの力に乏しい（男性の側に女性から言われなくとも互いの不安—とりわけ女性の一—をとり除くためにすすんで装着する意識に乏しい）。あまり強く言うと嫌われるとか、そういうことを口に出すこと自体女性としてみっともない—性に対し主体的であることが—という意識もあるという。これは重大なポイントといわねばならない。私は「二人が安心してセックス出来るにはコンドーム装着は不可欠」という主張と「コンドーム装着を男性だけの課題としてしまわないで、女性も手伝う、あるいは自分から装着してやる」というとりくみをしたらどうか提案している。なぜなら、自ら妊娠する女性は避妊を男まかせにせず、自分も主体的にかかわるべしと考えるからである。

若い大学生のよいところは、講義を聴いて納得出来たら実際にとりくんでみようとする柔軟性である。「やってみました。彼も喜んでくれました。面白かったです。」などというレスポンス（Response）が返ってくることもしばしばある。私は「コンドーム装着をセクシュアルプレジャーの道筋から外さずに、プレジャーの中にくみ込むことが大切」と言っているが、二人でとりくむ避妊についてこんなふうを考えさせたい。

経口避妊薬（OC）は認可されて13年、その利用率は劇的に高くなっているわけではない。何しろ国連加盟国で最後（1999年）の認可国となったわが国である。女性が自らの意思で、男性の力を借りることなく避妊することが望ましいとは思われぬ、そういう風潮が強いわが国である。OC認可をめぐる問題として、その副作用が喧伝されたけれども、本当は副作用がメインの心配だったのであろうか。副作用がそれ程の重要課題であるのなら、すでに認可しそれを利用している世界の女性たちの無知こそ笑われなければな

らないはずである。

もちろんOCには副作用がある。したがって使わないで済めばそれにこしたことはないだろう。問題の一つは、その「副作用」とはなにかを知ることである。知った上で、OCの利点（あるいは副効用も）と比較検討し、女性が自ら決めるといことである。わけもわからず怖れたり、わけもわからずただ飲めばいいと思ったりするのではなく、よくわけを知って飲む、飲まないを自ら選択することが大切である。妊娠は女性の身にしか起こらないゆえに、避妊のイニシアティブは女性とすべきであるし、男性はそれを受け入れなければならない。

またどんなに避妊に気づかっても、セックスをすれば妊娠の可能性は全くゼロではない。「中絶をしたくなかったらちゃんと避妊すればいい。避妊にとりくまないでにおいて妊娠したら堕せばいいなんて許せない」と学生は言う。もっともな意見ではある。しかし、中絶手術を受ける人は避妊にとりくまなかった人だという見方は正しくない。避妊にルーズだったケースももちろんあるが、避妊したにも拘らず失敗した人もたくさんいるのである。そして誰もが失敗する可能性を持っているのである。その時どんな場合でも産まなければならないのだろうか。産んで育てる条件も意欲もないのに妊娠を中断するのは罪人のなすことなのだろうか。そうした倫理観を持って生きる人がいることはわかるが、それはすべての人に課すべきことなのだろうか。

人間は長い歴史の中で宗教的倫理と法律を仕分けるようにした。そして多くの国々で人工妊娠中絶を合法とした。宗教と法律を不可分とする国々では中絶は殺人と同罪としているが、わが国は宗教倫理が日常生活にさほど浸透していない為もあって、世界にさきがけて条件付きで中絶手術を認めた。

大学生への講義では、中絶手術とはなにかについて、初期中絶と中期中絶を対比してかなり詳しく扱った。そして予期しない妊娠を避けるための労力とともに、どうしても産めない場合には出来る限り早期に中絶を決断すること、そのためにも妊娠週数の数え方（特に最終月経の初日から妊娠は始まったと数えるなど）について指導する。とりわけ自ら妊娠し中絶することのない男子学生にこの学習の必要性を強調した。そして中絶に対する見解は個人の価値観とかかわってさまざまありうるが、最低共通するものとして「悲し

いけれど必要なこと」という考え方を提示した。

#### 4) 性の多様性（性別に関する、性的指向に関する）への理解を深める

性の多様性（Diversity）は、いまこれからの人間の性について考えるキーワードの一つである。というのは、これまでの人間観は「男（女）、さもなくば女（男）」というように、性別二分論によって成り立っていてどちらかの（Stereo-type）にすべての人を当てはめていく、そしてどちらにもうまくはまらない人は変な人、まともではない人というように否定し排除してきた。また自分自身うまく当てはまらないと感じると自分を卑下し否定する。そういう考え方、扱われ方がなされてきた。それが20世紀終わり頃から科学的にも間違いであって、性別とは段階的変化（Gradation）をなすものという見方がひろがりはじめ、法的措置の変更もふくめ次第に定着しつつある。とても重要な人間観、セックス観の変化というべきである。性教育としてもこの観点をしっかり持ってすすめるなければならない。

大学生への講義では「なぜグラデーションなのか」について説明している。といっても、私自身まだ十分にわかっているわけではないし、科学的にもすべてが解明されているとはいえないようである。わかっているとされているものとして、性ホルモンの分泌によって性器と脳が性分化していくのであるが、その時期がずれていてそのためにそれぞれの分化の時期のホルモン環境が異なるため、両者に違い（性器は男性型だが脳は女性型になるなど一逆もある）が生じることがあること。もう一つは性染色体のYにある精巣決定遺伝子（SRY）が細胞分裂の際にX染色体に移ってしまい、XXなのに精巣が形成されること（XYなのにSRYを持たないYであるため精巣が出来ないこと）。これらの理由によって、性別違和感を持って生きている人は想像以上に多くいる（自分の男らしさ、女らしさをめぐる悩みも含めて）が、「性は分化する」という観点に立てば「どのように分かれるか」によって、まさにグラデーションとしかいえないような分かれ方をするという認識を育てたい。その中には「まあまあそんな自分を受けいれていこう」とする人から「外見（外から見える性別）だけかえたい人」もいるし、「服装は異性のものを着たい人」も「ひとがどう見るかというばかりでなく自分自身のアイ

デンティティ（自己認識）として性器をかえないと納得して生きられない人”もいる。そして今日、性別適合手術を受けて戸籍の性別変更も可能になり、すでにそれを実行している人が三千人近くもいることを知らせておきたいと思う。

そしてこの学習は「世の中にはそういう人がいる」ということへの理解からさらに、“自分自身の中にある異性性”に気づかせたい。

これに対し同じ多様性とはいっても同性愛、異性愛、両性愛、無性愛などは性愛の対象（性的指向）の多様性であって、性同一性障害とは全く異なった問題である。さらに性分化疾患（この表現には異論が出されている）という問題もある。わが国では、ここのところの違いが全くといっていいほど正確になされておらず、出鱈目に扱われていて、何もかもすべて変な人、変態、おかまなどといった差別語ともいうべき言葉で蔑視、ないし笑いの対象とする傾向がまだまだ強い。その意味でこの問題はセクソロジーについて学ぶポイントの一つである。

性同一性障害は性別自認（Gender identity）の問題であり、同性愛、異性愛などは性的指向（Sexual orientation）の問題であって、両者は全く違った性的概念をさす言葉であることを強調しておかなければならない。その上で、たとえば同性同士の性愛など時代をさかのぼれば、公認・当然視されていて特別なことではなかった頃もあったこと、それがキリスト教など宗教が人間社会に大きな影響力を持つようになる中で、生殖にかかわる性のみを認め、快楽を求めるものは邪悪視されるようになったことを知らせている。ナチスによる同性愛者迫害もそうだが「生殖につながらない性」の排除（ナチスには人種根絶やしの意図も）はリプロダクティブバイアス（Reproductive bias）として、いまの私たちの意識の中にも深く根づいているのではないかと私は語りかけている。

しかし性を人権とする考え方と運動のひろがりの中、長い期間を経て同性愛など性的指向による差別をなくし性の多様性を当然視する国、同性婚を異性婚と差別せず公認する国（一方でそれを犯罪とし、死刑などの刑罰を課す国もある）が確実にふえているのである。

セクソロジーを学ぶということは、こうした歴史、宗教、科学、人権など

と性を結びつけて深くとらえなおすということでもある。ともすれば性は社会風俗として扱われがちであるが、それをきちんと批判できる考え方と力（性的知性）を育てなければならない。性同一性障害や性的指向（前にも示したように無性愛のように性愛の欲求を持たない人もいることも含めて）について考えることは、そういう人たちの存在を認めるばかりでなく、自らの性別自認や性愛のあり方を見つめなおすことにもつながるであろうし、そのように期待して講義している。そしてそのことによって自らの成熟、人間の豊かさ、複雑さへの気づきから、さらに人間観の成熟に近づくよういざないたいと考えている。

### 5) HIV感染などSTI（Sexual Transmitted Infection）への認識を深める

エイズをふくむ性感染症の現状や感染経路などの基礎的内容についてはここでは触れない。このテーマを扱う際の注意点、留意点についてのみ記しておきたい。

- a. 「私の周りに感染した人はいないので、自分に関係ないこととと思っていた」という声が多く出るが、誰も自分が感染者であるということなど公表しない。気づいていないだけである。実際に感染者数はふえ続けている。
- b. 「感染した人は売買春にかかわるなど良くないことをした人である。真面目な人は感染しない」というように、性感染と道徳を結びつける考え方は間違っている。真面目であろうとなかろうと（真面目とはなにかということもあるが）感染予防に気をつけないセックスこそが感染を招くのである。
- c. 感染したからといって絶望と死だけが待っているわけではない。もちろん感染しないにこしたことはないが、エイズにしても今日感染がわかって早く対応すればその人が本来持っている寿命を生きることは可能になっている。セックスも妊娠も出産も行なうことが出来るし、薬を飲みながらであるが働くことも出来るようになってきている。日本でも世界でもすでにHIVとともに生きている人が沢山いる。このように早期発見、早期治療にとりくむためにも恐怖をかき立てるような指導はよくない。
- d. 性感染はペニスとワジナの接触によって起きるものと思い込んでいる人

は少なくない。それが感染経路として最も可能性が高いのは確かではあるが、実際の感染が病原体と粘膜（粘膜はウィルスなどを通す）、或いは病原体と傷ついた皮膚の接触によって起こると考えれば、オーラル（Oral）セックスも主要な感染経路となることはよく知らせておかなければなるまい。事実、クラミジア感染症や淋病は口の中の粘膜を通して感染しているのである。

- e. 性感染症に感染するのは若い人に多い。若い人は一般に性的好奇心や性的欲求が旺盛であり、また性行動に及ぶ機会も多いにも拘らず、性のトラブルには無頓着、無警戒であることが多いからである。「ものを食べれば胃や腸を病むことになる」「空気を吸えば風邪をひいたりもする」と同様に「セックスをすれば性感染症がうつることにもなる」のである。それぞれかなり予防することは出来るが、しかし完全にというわけにはいかない。とすれば、他の病いと同じように、放っておかないで早く対応（治療）することが重要である。そして自分が（相手が）感染していることがわかれば、うつさない（うつされない）手立てをとることは出来る。自分が（相手が）感染しているかどうか分からないでいると、うつして（うつされて）しまうのである。このことを十分理解させて検査をうけることの重要性―それがあなた自身と相手を大切にすること―に気づかせたい。

## 6) 性と暴力―自分には関係ないことと思っていないか―

暴力については（1）のデートDVのところでも触れた。ここではデートDVのように「親しい間柄」などではなく見ず知らずの（被害者にとってはそうであっても、加害者はよく知っている＝狙いを付けているという意味で）関係から、あるいは知ってはいるが特別に親しい関係ではないという、そうした加害者による、いわゆる「レイプ」をとりあげてみた。

レイプというと大学生による事件が時折ニュースになるが、その際こともあろうに被害者に対する非難、攻撃が相つぎ、その結果起訴をとり下げたりすることがある。そのため実際の事件の実数と犯罪とされる数の間にはかなりの格差がある。そこにセックスとジェンダーに対する偏見が根強くあることにまず気づかせたいと思う。その偏見の基には、この性暴力、セックスと

いうと何かエロティックなイメージを思い描くという男性本位のファンタジー（それはしばしばポルノグラフィーやアダルトビデオやネットのエロサイトに定番として登場する）が根っ子にある。そして「女性が挑発した」「そんな服装でそんな所（暗がりやお酒を飲むところ）にいるとは女性にもその気があった」「女性ものぞんでいた」などのように、女性の側に原因があったとか喧嘩両成敗的にどっちもどっち、というように「問題」を拡散させてしまう傾向がいまもある。こうしたレイプの「神話」に対し「レイプは最もプライベートな性を蹂躪することで、生きる力そのものを奪う暴力」という考え方を対置し実際に起きた事件をとりあげて考えさせている。エロティックでもなんでもない、殺人にも匹敵する凄惨な暴力であると。

この講義が学生にとって自分の（女性も、男性も）レイプ観を一新させていることをレスポンスペーパーなどから読みとることが出来て嬉しい。中には自分自身の恋人とのセックスのあり方に、レイプというべき要素がひそんでいなかったか点検しようとする学生もいるほどである。それは私の授業のねらいの一つでもあるが、この学びを通してレイプのとらえ方が変わり、被害を防ぐ知恵を身につけるとともに万一被害にあったとしても「それは自分の所為ではない」と毅然と言い切れる力、考え方を身につけてもらいたい。もちろん男性（まず男性と書いてよいと思う）には相手との合意のないセックスは暴力犯罪であることに気づかせたい。

## 7) あらためて両性の性の生理について学びなおす意味はなにか

大学生にいまさらという気がしないでもなかったが、実際に講義をした反応からすこぶる好評というか、「はじめてよくわかった」と自分のこと、異性のことを見直していることがわかる。月経のしくみ、ホルモン分泌による変化・変調、脳と卵巣のコラボレーション、月経随伴現象や月経前症候群のことなどなど男子学生にとってはじめて知ることも多いが、実は女子学生もよくわかっていなかったことも多いようである。また男子にしても性のしくみ、はたらき、性的欲求と性行動、女子の月経のように学ぶことなく迎える精通（初めての射精）、ウミのように思える精液、不潔感、つき上げてくる性の衝動との葛藤、マスターベーションの罪悪感など自分のからだや性に対



するファーストイメージがどうであったかはその後の長いセクシュアルライフの基礎をなすはずである。

私は「自分のからだや性に対して愛着やいとしさを覚えるなどポジティブでないと、ひとのからだや性にやさしく立ち向かい受け入れあうことがむずかしいのではないか」と語りながら、あらためて誤解、偏見、思いこみから抜け出るために互いの性への学習・理解を深めることの重要性を説いている。そのことがやさしい性行動に向かう核になることからだと考えるからである。

### 8) 恋愛、結婚、シングルライフ―自ら納得できる人生選択に向けて―

恋愛や結婚は学生たちにとって関心の大きいテーマである。しかし幸せな人生を思い描く中で、その比重には大きな個人差が生じている。それはある意味で当然であろう。とくに結婚は意思的、選択的に行なわれるものであって誰も彼もすることでもなければ、しなければならぬものでもなくなった。その上で結婚するとすれば、それは何のためになのであろうか。結婚すれば幸せになれるなど、幻想であることが明らかになりつつある昨今、これは十分に学習する価値のあるテーマといわざるを得ない。私は半期にわたるセクソロジーの講義の最後をこのテーマでしめくくっている。

わが国において結婚を支えていた絆は経済（生活の基礎という意味で）、法律、子ども、そして社会的規範（結婚して一人前とか、離婚は恥とかいう）であったように思う。しかしまず社会的規範としての絆はすでに殆ど消滅したといってよい。あとの三つのうち経済的絆は女性がまだ自立して生活し続ける経済的条件が整っていないために依然として力を保っているが、しかしその絆は弱くなりつつある。法律や子どもについても、結婚していることによる優遇措置が縮小していったり、子どもも1～2人になってきていて絆としての意味も小さくなった。ならばこれからの結婚を支える絆とはなにか。私は「情緒的な絆」と「性的絆」の二つを学生に提示している。いま、これからの結婚（婚姻という形ばかりでなく、継続的共生生活も含めて）を支えるのはお金、法律、子どもといった具体的に手ざわりのあるものではなく、むしろ実態の見えない、不確かな「情緒」や「性」によってであろう。

「情緒」をあえて私は精神的連帯感と言いかえ、「性的絆」とは互いに性的に価値があるものとして、心地よさを分かちあえる関係と説明していて両者（情緒と性）は深くつながっていると強調している。

これらは生きる上で絶対になくってはならぬものではないし、それらを求めない生き方も当然あるし、あってよい。しかし結婚（継続する共生生活）を求めるのであれば、“たがいの自立性を尊重しあったゆるやかな生活の共同”を支える二つの絆について理解を深め合い、覚悟して臨むことが不可欠であろう。それはまた「人格の成熟」という、ともに生きること自体の意味を問う大きな課題へのチャレンジでもある。

以上が15時間に及ぶ講義内容のトピックスである。学生たちはこの講義を聴いて自らのセクシュアルライフを見つめ直し、これからについて展望を綴っている。紙数の関係でそれらをお示し出来ないのは残念であるが、学習する前にくらべ明らかにより確かなものになる、変わろうとしていることを読みとることが出来て嬉しい。そしてそこに私は性教育の必要性と可能性を痛感している。

### 講義テキスト

村瀬幸浩. (2004). 『セクソロジー・ノート』. 東京：十月舎

### 参考書

村瀬幸浩. (2006). 『恋人とつくる明日一育て合う安心と信頼のための9章』. 東京：十月舎

## **The Possibility of Changes in Sexual Education —Creating Connections between Sex and Gender Studies— Yukihiro MURASE (Hitotsubashi University)**

The theory of <Sex=Instinct> is still causing problems when considering sexual education. Basically, by continuing to ask what kind of instinct this is, it sustains procreation. However, there is no such instinct. It is quite ordinary nowadays that there are people who decided they do not want children, or people who cannot have children, or people who will not have sex, or people who do not want to get married. In fact, the reasons people choose to have sex, and with whom they partner, and their reasons for doing so, differ depending on their way of life and their ideas about life. Therefore, it is important to create our understanding based on <Sex=Culture>. Further, it is necessary to learn about sex apart from misunderstandings regarding sex, sexual discrimination and stereotypes.

The goal of teaching about sex is to help people think about their way of life and decide how they want sex to be. Within the realm of teaching, three topics should be addressed: science, relationships and diversity. Science allows us to learn about sex based on facts and reality. For example, in order to understand birth control and how to avoid pregnancy, we must understand female biorhythms. Additionally, to understand gender identity disorder, we should learn about birth and how life begins. Relationships give perspective, forcing people to think deeply about how good and bad sex reflect good and bad communication. The division between pleasurable sex and sexual violence is also shared in this point of view. Diversity is inside all of us, which means that erotic attraction is not formed in or based on whether you are called a man or a woman. Diversity is a human condition. My argument is based on these three perspectives.